第 15 回研究会より

参加者　８人+森田智幸（山形大学講師）先生

会場：雪の里情報館

今年度最初の研究会です。
ゴールデンウイークの最中での開催で、参加人数が心配でしたが、８人も集まっていただき、
さらに山形大学の森田先生も参加していただき、本当に楽しく実り多い研究会になりました。

昨年からの会員の方ばかりなので、自己紹介というよりも、近況報告や、今年度の一人ひとりの挑戦を話してもらいました。

その後、さっそく M 中学校の３年国語の授業を視聴し、議論を交わしあいました。

【授業カンファレンス】
M 中学校　中学３年国語科　「奥の細道を詠む」
　教科書より

三代の栄耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたに有。	藤原三代にわたる栄華も、今となっては夢のようであり、平泉の表門の跡は一里程手前にある。
秀衡が跡は田野に成て、金鶏山のみ形を残す。	秀衡の館跡は、今では田や野原に変わり果て、秀衡が造らせた金鶏山だけが、その形をとどめている。
先、高館にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河也。	まずは、高館に上ってみたが、そこから見える北上川は、南部地方から流れ来る大河である。
衣川は、和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入。	衣川は、泉ヶ城のまわりを流れ、高館の下で北上川と合流している。

泰衡等が旧跡は、衣が関を隔て、南部口をさし堅め、夷をふせぐとみえたり。	泰衡たちの屋敷跡は、衣が関を隔てたところにあり、南部地方からの出入り口を固めて蝦夷の侵入を防いだと見られる。
偖も義臣すぐつて此城にこもり、功名一時の叢となる。	それにしても、よりすぐった忠義心のある家来たちが高館にこもり功名を競ったが、そうして得られた功名も一時の夢と消え、今では草が生い茂るばかりだ。
国破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷て、時の移るまで涙を落し侍りぬ。	杜甫の「国が破れ滅びても、山や河だけはむかしのままの姿で残っている。荒廃した城にも春はめぐり来るが、草木だけが生い茂るばかりだ」の詩を思い浮かべ、笠を置いて腰をおろし、いつまでも栄華盛衰の移ろいに涙したことであった。
__夏草や兵どもが夢の跡	人気のないところに、今はただ夏草だけが生い茂るばかりだが、ここは、かつて義経主従や藤原一族の者たちが功名・栄華を夢見たところである。知るや知らずやこの夏草を眺めていると、すべてが一炊の夢と消えた哀れさに心が誘われる。

課題
「時の移るまで涙を落とし侍りぬ」

なぜ、涙を流せたのか？

【授業の断片】

全員起立して、教科書の上記の部分を一通り、教師が読んだ後を、生徒が声に出して復唱していく。「息遣いを合わせて」と教師がなんどか生徒に語っている。
その後、課題を提示。間髪入れずに４人のグループでの学びの形をとる。
グループ１では、
男子Ａ：中国の詩を思い出して泣いた

女子 A : そうなの？
男子 A : あの頃はこうだったって
女子 A : 中国の詩を思い出して？ややこしい。中国と日本を重ねたの？

その後、全体での話し合いに。机はグループのまま。
教師 :「わかったこと、わからなかったこと、全体でだしてくれる」
男子 B : たぶん、戦いがあって、しばらくたったんだけど、そこにあった河は変わっていなくて自然の神秘や景色に感動した
女子 B : 感動それだけじゃない。（視線は、男子 B に向かっている）
教師 : 根拠は？資料集のどこからといってくれたらみんなわかりやすい。
女子 B : ○○くんが話していたんだけど、資料集 P６２の地図では、平家物語の地図で、義経の戦い敗れにげることが書いてある。
女子 A : 確かに平泉はあるけど、地図の富士川に×マークがある。平泉には×はない。戦いは平泉ではなかったのでは？
女子 B : 教科書の P20 現代語訳に、「よりすぐりの義臣たちが戦った」って書いている。
教師 : この辺の資料を用意している。俳句の学習のときにも言ったけど、歴史の時代背景なんかわからないと、句の意味がわからないことがあったよね。用意した資料は一つはマンガから、もう一つは雑誌からのもの。（一人２分ずつ配布）
生徒 : 多くはマンガから読み始める。読んでもらいたいページにはあらかじめ付箋が貼ってある。その後、雑誌の奥の細道の記事。生徒にとっては、もういちどマンガにもどって繰り返し目を通していた。

教科書 : 資料読んだら、教科書にもどらないとダメだよね。もう一度、声に出して読もう。
教師が句を読んで、後に続いて生徒が再び読む。

その後、再び小グループ学習２度目

そして、全体での話し合いに戻す
教師 : 見えたこと、見えてないこと出してくれる？
女子 A : わかんないことだけど、芭蕉は義経じゃなくて、義臣たちを思って泣いたんだろうか？
男子 B : 義経も入っている。マンガにもそう書いてあった。
男子 C : P７４のマンガ。「義経と家来の栄光はない」といっている。
女子 C : 義経を思ってないたんじゃない。戦いにがんばったのに、そのがんばっ

た跡がなくなったことに泣いたんだ。
生徒一部：あ～。そういうこと。
女子Ａ：もやもや消えた。あった出来事じゃなくて、何もないことが泣かせた。
・・・・・・・
残り５分ぐらいで
教師：後半の授業は、曽良の日記から。経堂は開かずとある。芭蕉の詠んだ句は、開いていたと書いている。でもどうやら、曽良の日記のほうが正しいらしい。なぜ、開いていないはずの経堂を開いていたと詠んだのだろう。

（結局時間もみじかく、この問いの答えはでないままに終了している）

【研究会での議論】
・生徒の語り口は、先生の語り口に近い。詠みも丁寧でゆっくり。
・考えさせる授業の場合、自分は落としどころをどおしたらよいのか迷ってしまう。今回の授業は、句を味わうというところか。
・やはり課題が面白い。だから生徒が主体的に学んでいる。
・４人グループの形をとっても、輪の形になっている。だからその後、グループを崩さずに全体討議ができている。参考にしたい。
・教師が、根拠、どこにあるという問いかけが大切だということがわかる。
・ほとんど話しているのが女子。女子と男子の成長差からか。女子をどう生かすか、自分の授業でも悩んでいる。
・教師がときどき使っている「息遣いを合わせて。ここはグループでなく全体の息遣いで」というのがちょっと違和感がある。
森田先生から
「全体」という言葉は強い言葉。この授業では「息遣い」がキーワード。この教師は、教材研究も熱心。熱心だからこそ、やや教師のほうですすめていくことが多かった。その点を変えようとしたところが、この授業のチャレンジ。前半の学習は、よく生徒の発言を聞いているし、待っている。たとえば「資料の何ページにあるか言って、そうすると聞きやすいから」とか「ちょっと待って」とか戻すことばが多い。ただ後半の学習は、時間もないこともあり、進めていく言葉（これまでの自分）が多くなってしまった。やはり焦っていた。だからプラン優先になってしまった。前半と後半は対照的。
・資料の量が豊富。ただ、資料にマンガを使っていたのはどうだろう。自分もマンガを使うことがあるが課題では使う。資料としては使わない。
（森田先生）なぜ、開いたのか？（後半の問い）なぜ？という問いは、わかるこ

とを求めてしまう。なぜ？という問いの難しさを改めて感じた。根拠という聞き方も難しい。どこからそう思ったの？要するにどこから触発されたのかを振返させたい。

その後、課題や授業のデザインに欠かせない“真正制”について議論を進めた。
・研究としてはここに焦点をあてるのは難しい。教師の専門性や学問の本質などは、教師一人ひとりに問われているもの。
・教師が夢中になっているところに現れてくる
・授業のゴール（どんな姿になっていたいか）をイメージするには、これまでの学習の経験がどのようにつながっているか、つなぎかたのゴールをイメージすること。

戻る